

日本個性化教育学会第9回全国大会は、テーマを「個性化教育から見たアクティブ・ラーニング」とし、東京・上智大学で開催されました。会員の皆様に、その報告を行います。

## ＜第9回日本個性化教育学会・東京大会報告＞

○テーマ 個性化教育から見たアクティブ・ラーニング

○期 日 2016年8月20日（土）・21日（日）

○会 場 上智大学

○日 程 1日目 8月20日（土）

9:30～ 9:45 開会行事

9:45～11:15 講演1

「資質・能力の育成とアクティブ・ラーニング」奈須正裕 上智大学

11:30～12:30 講演2

「小学校英語教育の今後の可能性」加藤幸次 本会会長

※藤田保氏（上智大学）急病のため、加藤幸次氏（本会会長）が代わって講演を行った。

12:30～全国理事会

13:30～16:45 分科会・自由研究発表

分科会 A

「4技能をバランス良く育てる英語教育Ⅰ」

コーディネーター 加藤幸次 本会会長

プレゼンター 伊藤静香 帝京平成大学

Will Simpson 明海大学

分科会 B

「資質・能力の育成を目指したカリキュラムと授業の創造」

コーディネーター 浅沼茂 東京学芸大学 澤田稔 上智大学

実践報告 浦郷淳 佐賀大学附属小学校

松倉紗野香 上尾市立東中学校

自由研究発表

コーディネーター 谷口育史 近大姫路大学

研究発表 香田健治 関西福祉科学大学

「国語科における書く能力の評価に関する研究」

ーモデレーション法による評価研修を手がかりにー

竹村直紀 上智大学大学院

「個人史を題材としたモラルジレンマ授業の開発と実践」

小山貴博 東京YMCA 社会体育保育専門学校 野村昂平 星城大学

「日本とイランにおける青年期女性 子育て観の比較研究」

藤原靖浩 大阪市立大学

「学校教育（特別活動）と地域の連携・協働を目指した参画型ボランティア活動～10年間の取り組みと成果からの考察～」

人見修一 神戸市立美野丘小学校

「一人ひとりが活動を深めていく総合的な学習の時間の展開～

「わたしは神戸観光大使」の実践から」



## 2日目 8月21日(日)

9:00～12:00 分科会

### 分科会 C

「4技能をバランス良く育てる英語教育Ⅱ」

コーディネーター 加藤幸次 本会会長

プレゼンター 伊藤静香 帝京平成大学・Will Simpson 明海大学

### 分科会 D

「幼保小連携と生活科・総合を核としたカリキュラムの創造」

コーディネーター 鈴木正敏 兵庫教育大学

実践報告 鈴木美佐緒 仙台市立広瀬小学校

寶来生志子 横浜市子ども青少年局

13:00～16:00

シンポジウム 「子どもの事実で授業を創るーカリキュラム・マネジメントを超えて」

コーディネーター 奈須正裕 上智大学

シンポジスト 浅沼 茂 東京学芸大学

加藤幸次 本会会長

野村ゆかり 高知市立潮江南小学校

宮川啓一 岐阜聖徳学園大学

16:00～16:30 会務総会

16:30～16:45 閉会行事

## 講演1 「資質・能力の育成とアクティブ・ラーニング」

奈須 正裕（上智大学）



今回の学習指導要領の編成について、教育課程分科会の審議のまとめがこの8月に発表される予定であり、その内容を見据えた大会になりますと講演は始まった。

現代は、知識基盤社会といわれ、答え無き時代、知識を自在に「活用」し、新たな知識を自力で生み出すことが求められる社会、志と判断力、他者との協働、問題の発見・解決、新たな価値の創造が全ての人に求められる時代になったと述べられた。

さて、今回の審議では、いきなり教科の議論をしなかった。子供はどんな学びをするかなど原理的な議論を行ってきた。「学習する子供の視点に立ち」がキーワードであった。「何を学ぶのか（内容）」を通して、「何ができるようになるのか」という資質・能力の育成を目指す。その方法として、「カリキュラム・マネジメント」があり、「アクティブ・ラーニング」がある。教科の本質（＝見方・考え方）が資質・能力育成の「鍵」とであると述べられた。



また、学力論には2つの系譜があり、一つは、コンテンツ・ベースの学力で、「内容」（領域固有な知識・技能）中心で「何を知っているか」というA問題の学力（不活性な知識でも正解に至れる）である。もう一つは、コンピテンシー・ベースの学力で、「資質・能力」（思考力・意欲・社会スキル）中心であり「どのような問題解決を成し遂げるか」という、B問題の、PISA型学力（活性化された知識、思考力）＋非認知的能力（意欲、社会的スキル・・・）である。活用がきく学力が本当の学力であり、B問題の学力が大切である。A問題の学力も反復練習に頼らず概念的理解が必要である。B問題ができるようになれば必然的にA問題もできる。学校は、B問題をできるように努力すべきであると述べられた。

また、幼児教育に触れられ、4歳の自制心が2歳まで持続する。また、情緒もスキルと捉えられ、幼児教育における非認知的能力育成の重要性、幼児教育の質が生涯にわたる可能性を示唆すると述べられた。まとめとして、子供主体でしっかり教えることが大切で、経験主義と系統主義の対立図式を超える。つまりは、「オーセンティックな学習（Authentic Learning）」：「本物」の文脈での学びに主体的・探究的に取り組むことにより、既習を生かし、インフォーマルな知識・経験を存分に発揮することで、「教科の本質」的な概念などより深い意味理解に到達し、学びの価値や醍醐味を実感する授業」と「明示的な指導（Explicit

Instruction)」：授業中に経験したことを明示化（自覚化）し、道具化（概念化・言語化）し、さまざまな場面で組織的に「活用」することで、教科の本質や汎用的能力を自家薬籠中のものとする授業。これら2つを「アクティブ・ラーニング」と「カリキュラム・マネジメント」でバランスよく融合させていくことが大切であると締めくくられた。

文責 太田 始

## 講演2 「小学校英語教育の今後の可能性」

加藤幸次（本会会長）



平成32年度には、小学校3、4年生に「英語活動」5、6年生に「英語科」の授業が導入されようとしているのに、多くの小学校教師はまるで“他人事”と装っているように見える。どうせALTにまかせておけばよいとばかりに、研修も少なく、研修に対する反応が冷たい。それぞれの担任の先生がやるのですよ。当日上智大学の藤田保先生のピンチヒッターになられた、加藤幸次先生の語気は強かった。

加藤先生はまず、藤田先生のレジュメに関連して、英語教育における平泉渉「実用英語」対渡部昇一「翻訳（文法）英語」論争について解説され、加えて2000年に出版されこの論争に大きなインパクトを与えた船橋洋一の「あえて英語公用語論」についても当時の世情も含めて解説された。また英語教育改革の五つの提言の中の「改革4 教科書・教材の充実」に触れられ、ICTの活用に目を向けて行かなければいけない点を強調された。

次に先生が最近出された本をもとに目の前にせまっている英語指導について、3つの戦略を具体的に提示された。その1. 日常生活で使っているカタカナ英語を生かす。英単語800語以上、子供でも300語を知っているのをそれを活用する。その2. いわゆる「教室英語」教師が普段使っている指示語「座りましょう 等」にどんどん英語を取り入れ、英語での表現を日常化していく。その3. キーセンテンス（基本表現 I like …）をキーセンテンスボードに書いて掲示しておく。このようなスキルがわかれば、先生方はもっと自分自身が楽しく、英語の授業を展開できるでしょう。「教室英語」を日常使いこなしていくことで“学校”英語で英語に対する自信をはく奪されてきた先生方が自ら楽しく子供たちの前に立って授業を展開していけますよ。期待しています。加藤先生から熱いエールがあった。

文責 加藤久美子

参考図書『そこが知りたい 英語指導50の疑問』加藤幸次・伊藤静香著 黎明書房2016

## 【分科会A・C】「4技能をバランスよく育てる英語教育Ⅰ・Ⅱ」

コーディネーター 加藤幸次（本会会長）

プレゼンター 伊藤静香（帝京平成大学）・Will Simpson（明海大学）

### 1日目（分科会A）小学校の英語指導における工夫ー「学級担任とALTのチーム・ティーチング」ー

実際に小学校で使用されている『Hi, Friends! 2』から1つのUNITを選択し、単元指導計画および指導案についての解説後、伊藤先生（担任役）とSimpson先生（ALT役）によるモデル・ティーチングを行った。ALTとのチーム・ティーチングを想定し、参加者に実際にアクティビティに参加してもらうことで、教える側・学ぶ側双方からの検討が可能となった。参加者のメモや質問をもとに、後半はコーディネーターである加藤先生を中心に授業でのALTとのチーム・ティーチングの在り方についての議論がなされた。



ALTとは本来はアシスタント教員ーAssistant Language Teacherーの意味であるが、県および市の教育委員会ごとにその裁量が異なる現状がある。学級担任がALTをどのように活かした授業ができるか、それとも、ALTに授業を任せるか。外国語活動の指導案は、担任主導型とALT及び外部講師とのチーム・ティーチングの両者について構成を考えるが必要が示された。また、日本人教師が常に懸念している英語の正しい「発音」については、チャンク（音のかたまり、リズム）での教え方はヒントとなったようである。4技能（聞く・話す・書く・読む）の指導については、モデル・ティーチングのように文字を最後に出すことで、文字に頼らずに音を捉え、発音できる段階からの文字指導や読解指導の重要性が確認できた。

## 2 日目（分科会 C） 小学校の英語教育をめぐる諸問題「英語の早期化・教科化」



はじめに、伊藤先生が「小学校の英語教育における現状－教師の意識調査をベースに」と題した発表をした。教員は、国際共通語として英語の重要性を認識しており、ALT の増員には賛成だが、日本人教員の能力の強化や外部評価（英検、TOEIC）を導入することについては慎重である傾向が示された。次に、My Experience of the teaching English in China and Japan と題し、Simpson 先生が、中国における英語学校の教師経験に基づいた発表をした。ALT の担う役割の 1 つとして、Ambassador（大使… ALT の持つ国籍が、その国の代表として捉えられる）という表現があった。イギリス出身の Simpson 先生は「サッカーが好き？」と聞かれたら大好きと答える（が、イギリス人全員が好きではない…）。彼を見た瞬間に「gentleman！」（自分は紳士ではないのだけど…）と言われる例を挙げた。英語を通じて、ALT を通じて「異文化」を捉えるという視点からの英語教育のアプローチに示唆を与える発表であった。

最後に、加藤先生より、対話式テストの動画を観てフロアとの議論を行った。2020 年から高学年の英語は教科となるため、評価規準の在り方が今問われている。英語コミュニケーション力に着目し、量的・質的な観点からの評価の在り方について 1 つの手がかりとなる議論となった。

文責 伊藤静香

### 【分科会 B】 「資質・能力の育成を目指した授業の創造」

コーディネーター 浅沼茂 東京学芸大学・澤田稔 上智大学  
実践報告 浦郷淳 佐賀大学附属小学校  
松倉紗野香 上尾市立東中学校

はじめに、佐賀大学付属小学校の浦郷淳先生より「算数科における資質・能力の育成を目指した授業の創造」という実践発表があった。研究テーマである「問題提示の工夫」「問いかけの工夫」は、それぞれ、資質・能力の育成の 3 つの観点のうちの「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性の涵養」や「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成」にあたるとした。「何を問うか」「どのように問うか」をどのように行っていくのか事例を挙げ、誰もが解ける問題の提示、導き出された答えの根拠を問うこと、規則性に目を向けさせるような問いかけをすること、そしてその問いかけでは系統性を意識することなどが必要であるという発表であった。



続いて、埼玉県上尾市立東中学校の松倉紗野香先生より「中学校における『グローバル・シティズンシップ教育』の可能性」という実践発表があった。持続可能な社会の担い手を育てるため、生徒一人ひとりの社会参画意識の向上とグローバル・シティズンとしての資質・能力の育成を図ることを目的とした研究である。学習形態としては、教師をファシリテーターとした参加型の学習で、年間 35 時間の総合的な学習の時間を使って行った。正解は一つの決まったものではなく、教師と生徒と一緒に考えていくという学習である。昨年度は、1 学期にはクラスで実施した参加型学習で「難民問題を考えよう」とテーマで学習を行い、2 学期からは生徒が自ら課題を設定して探究学習を行い、3 学期には発表会を行った。実践を通して、生徒が社会に目を向け、社会に参画しようとする意識が芽生えることができていた。



最後に上智大学大学院の伊藤慎悟さんが「グローバル・シティズンシップ科における学習観の検討」ということで、松倉先生の実践を仮説を立て調査を行うことで、生徒の学習観に迫った。学習観とは、授業をどのようにとらえているか、学習とはどのようなものか、という認識である。調査の結果は、資質・能力の育成を目指した授業を行うことで、生徒は従来の授業とは異なる学習観を持つことが考えられた。例えば、結果ではなく過程を重視したり、丸暗記をする学習ではなく意味理解をしたりする学習であるという学習観でとらえていた。

文責 大野俊一

【自由研究発表】 ※発表者と発表内容は、1 P 目に記載。

【分科会D】 「幼保小連携と生活科・総合を核としたカリキュラムの創造」  
コーディネーター 鈴木正敏 兵庫教育大学  
実践報告 鈴木美佐緒 仙台市立広瀬小学校  
寶来生志子 横浜市子ども青少年局

はじめに、仙台市立広瀬小学校の鈴木美佐緒先生より「幼保小連携と生活科・総合的な学習の時間を核としたカリキュラムの創造」という、カリキュラムの縦のつながり、子供同志のつながり、教師同士のつながり、さらに保護者同士のつながりを模索した実践を発表された。それは単なる交流ではなく、幼稚園での遊びを通して学んだことを先行経験とし、その教育の成果が小学校以降の生活や学習に生かされる幼児期から児童期への発達の連続性や学びの連続性を確保するカリキュラムの創造という大変質の高い実践であった。



連続性あるカリキュラムの作成については、4つのつながりをキーワードとして発表された。①カリキュラムをつなぐ、幼保小が共同で作成する。②幼保小の子供と子供をつなぐ、相互のねらいを明確にする、交流の振り返りから次の活動内容を検討する。③幼保小の教師と教師をつなぐ、保育や授業を相互に参観し、事例を持ち寄り話し合う。④保護者と保護者をつなぐ。どれも意欲的で質の高い実践であり大変参考になった。

次に、横浜市子ども青少年局の寶来生志子先生より「子供が手応えを感じられるカリキュラムを創る」が発表された。ゼロからのスタートではない、スタートカリキュラムの紹介から始まった。それは、小学校1年生はゼロからのスタートではないという大人の発想の転換を鍵とし、子供は学ぶ意欲と学ぶ力をもった有能な学び手であるという肯定的な子供観を幼保小の教師で共有することが、幼保小連携の大切な視点であるとの考えが述べられた。



その上にたって、一人一人の子供の思いや願いを実現する実践の発表がされた。大岡小はてな？びっくり！ぼうけんたい！、音のはてな？びっくり！音がくたい！など、興味深く拝聴した。まさに、価値ある体験を通して、気付きが生まれ、子供が充実感、達成感、自己有用感、一体感などの手応えをつかみ、そのことが安定的で持続的な学びに向かう力を育成し、そのような手応えを感じられるカリキュラム創りという実践を通じた発表であった。最後に、教師自身が育てたい子供像と資質・能力、教科等のねらいをしっかりと見極め、常にアンテナを高くして子供の言葉に耳を傾ける事の大切さを力説された。

参加者からは幼保も小も実践の質を高めていくことが大切である。地域によっては自由保育というより設定保育を強力に進める園が増えているという意見等があった。そのことについては、私立の幼稚園の経営に関わることは中々言えないという難しさがある。しかし、保護者に質の高い実践を公開し働きかけていくことが大切であるとされた。

まとめとして、兵庫教育大学鈴木正敏先生より、小学校に入ってからゼロスタートではない。乳幼児期に萌芽を持つ子供たちの主体的で総合的な遊びを通じた学びを経験した子供たちをどのように受け止め、一人ひとりの心もちや意欲に寄り添いながら、どのように学習活動を構成していくべきかについて豊富な事例を元に話された。わくわく感を大切に、乳幼児期に萌芽を持つ子供たちの「学びに向かう力」をつなげていくためには、それぞれの園と学校がお互いに意識をもち、連続性を持ったものとして子供の学びを捉えなくてはならない。幼保小の連携は互いの顔が分かる事が第1歩であり、スタートカリキュラムに大切なことは、幼保の事を良く聞き、過去の栄光を聞き出す。学習は強制ではなく、自分で決められることが大切であるという述べられた。

文責 多田信夫

## 日本個性化教育学会第10回全国大会（2017年度）

会場：岐阜聖徳学園大学 開催日：検討中

## シンポジウム

「子どもの事実で授業を創るーカリキュラム・マネジメントを超えて」

コーディネーター 奈須正裕（上智大学）

シンポジスト 浅沼茂（東京学芸大学）

加藤幸次（本会会長）

野村ゆかり（高知市立潮江南小学校）

宮川啓一（岐阜聖徳学園大学）



浅沼先生はかねてより「カリキュラム・マネジメントなんて言ってるからダメなんだ」と主張し続けてきた。なぜダメなのか、シンポジウムの前半はその答えを奈須先生との対話を通して明らかにしていった。

文部科学省が示すカリキュラム・マネジメントには3つの側面があるが、両先生は「予めの目標に向かって万事を効率的にすすめるPDCAサイクル」に注目し、浅沼先生はゼンメルワイスが産褥熱の原因を推定したエピソードから「知識は自分で発見するもので、そこには直感的な想像的創造力が働いている」ことを、奈須先生はガリレオが地動説を見出したエピソードから「科学的知識はデータを積み上げてできるのではなく、常識や信念による理解をひっくり返すような発想(思考のジャンプ)によって直感的に発見される」ことを語った上で、知識を所与のものとして効率的に再分配・再構成するマネジメントや、資質能力を「〇〇力」と名付けて対象化し効果的に指導しようとするのはナンセンスだと論を展開していった。

両先生の対話を通して、到来しつつある「正解のない時代」を生き抜くために「混沌に耐え、泥沼の中で大事なことを見出す力」を育てるには、経済原理に基づく従来型のマネジメントから脱却し、教育の原理(人間的、平和的、民主主義的等)に基づいた「子供の視点に立つ」授業、単元、カリキュラムの創造を目指すことが目標として見えてきたが、それを「どうやって成すのか」は、考え続け実践し続ける現場の力にかかっているのだと感じた。

シンポジウムの後半は、カリキュラム・マネジメントを現場の視点で検討していった。

野村先生は第四小、横内小、潮江南小での15年間の自らの実践から、総合の単元づくりにはセルフ・マネジメントが、教師の取り組みを学校の財産にするには学校のカリキュラムづくりが、また学校が地域社会や文化と融合しながら発展していくためには戦略マネジメントやネットワーク・マネジメントが重要であることを具体事例で示し、学校の役割は、子供たちが生きていく地域が元気になるような活動を創りだしていくことだと語った。

宮川先生は、かつて東海市の中学校で学校カリキュラムを全面的に見直し総合の原点ともいえる実践を成した経験から、国の改革スローガンでは学校や教師はかわらないと力説し、さらに、何のためにアクティブ・ラーニングの授業をするのか、資質能力の視点から考えたコンテンツはどうあるべきかを教師一人ひとりが考えざるを得ないような大胆なアプローチが必要だと投げかけた。これを受けて、本大会の各分科会で登壇した実践者からは、慣習や教師文化や常識に捕らわれず本気で「やりたいこと」を実践して、子供が変わり教師や学校が変わっていった様々なエピソードが語られた。最後に浅沼先生は「こんな実践やってみたい！」と心から思える現実と出合った時に人は動くのです」と力強くつぶやいた。

文責 佐野亮子



＜事務局への問い合わせ・連絡先＞

庶務部長 佐久間 茂和

〒338-0013

埼玉県さいたま市中央区鈴谷 3-9-14-510

TEL 048-678-1681

e-mail sakuma.a@s7.dion.ne.jp

日本個性化教育学会ホームページ <http://koseika.com/>

日本個性化教育学会

第27号

平成28年 9月17日発行

編集責任者 事務局長 奈須 正裕

編集 広報部 多田 信夫